国際ﾛｰﾀﾘｰ第2620地区
静岡第5ｸﾞﾙｰﾌﾟ

POWER HAMAMATSU
ROTARY CLUB
JAPAN

週報 パワー浜松ロータリークラブ

親睦と奉仕の扉へ

RI 会長 ホルガー・クナーク/第 2620 地区ｶﾞﾊﾞﾅｰ 志田洪顯 /会長 中野敬司 /幹事 村田誠
〒430-7733 浜松市中区板屋町 111-2 オークラアクトシティホテル浜松内 Tel:053-452-0800
Email:info@power-hamamatsurc.jp http://www.power-hamamatsurc.jp
創立：2002 年 10 月 22 日 認証伝達式：2003 年 4 月 29 日 スポンサークラブ：浜松中ＲＣ

ロータリーは機会の扉を開く
Rotary

第853回例会5月25日（火）AM7：30～8：30

■会場：オークラアクトシティホテル浜松 3 階 チェルシーの間
■司会：知久武 中野雄介
■点鐘：中野敬司 ■週報：鈴木亮
■ロータリーソング：「奉仕の理想」（※音楽のみ）
■ゲスト：卓話者 瀬戸脇正勝様
米山記念奨学生 陳俊達さん

出席報告/スマイル報告

会員数 76 名（内出席免除会員 1 名）
出席数 54 名 出席率 71.05%

スマイル 4 件

会長挨拶

新型コロナウイルスの感染者が浜松でも増加したままの状態が続いています。まだまだ気を付けて過ごしたいですね。

さて 5 月と言えば春分と夏至の中間にあたり、暦の上では夏が始まります。旬の味覚は筍とわかめの煮物、塩焼きにした空豆。ふと辺りを見渡せば、田植えを済ませた田んぼなど、個人的にはとても好きな季節です。

先日、訪問先で「ヘルプマーク」について初めて知りました。ヘルプマークとは、一見健康そうに見えるその人が、実は障害や疾患を抱えており、何らかの支援や配慮を必要としていることを周囲に知らせる事で、支援を得やすくなるよう作成されたマークです。ストラップ型のこのマークは、公共交通機関の多い東京都で 2012 年から配布が開始されました。ただ、この便利なヘルプマークですが、使用者の中にはマークを表示してまで支援を得るのも心苦しく、何となくつけづらい方もいるそうです。そのような方の為に、最近では援助したい人や、手助けしたい気持ちをしっかり意思表示する「ヘルプできますマーク」も考案されています。周囲の援助が必要な人と、援助したい人を繋ぎ、お互いタイミングよく出会うことができたらいいな、と思いました。また、他のサポート活動として「シトラスリボンプロジェクト」もあげられます。御存知の方も多いかと思いますが、コロナウイルス感染症に関する差別や偏見を無くそうと愛媛県から始まり、今では全国に広まった運動です。

このような「ヘルプマーク」「ヘルプできますマーク」「シトラスリボンプロジェクト」などを通して、全国に人のやさしさの輪が広がっていると思いました。

幹事報告

今年度の最終例会、通常は夜例会ですが、このコロナ禍のため朝例会に変更になります。

今週の土曜日地区大会が行われます。リアルとオンラインのハイブリッドで行う計画です。出席者が限られていますので対象者の 8 名で参加します。

本日の例会後にメイフェアにて 5 月度の理事会を行います。

委員会報告

なし

スマイル報告

中野会長・村田幹事
「瀬戸脇様ありがとうございます。」

青少年育成部会
「瀬戸脇様、青少年育成にご尽力頂きありがとうございます。」

原田道子会員
「誕生日祝いありがとうございます。女は勘と度胸」

坂井光藏会員
「週刊ダイアモンド誌に掲載されました。」

議　　事

青少年育成部会
「ブラインドサッカーによって青少年教育を！」
卓話者：瀬戸脇正勝　様

安間孝明会員
　瀬戸脇様は福祉大学を卒業後、静岡北養護学校の教員を経て、支援学校の校長を歴任され、現在は NPO 法人オール静岡ベストコミュニティ理事・世界福祉法人青い鳥理事・静岡 FIB サッカー連盟理事・静岡障がい者就業研究会理事等、障がい福祉に大きく貢献されています。また日大でも教鞭をとっていらっしゃいます。障がい者のスポーツを勧めるだけでなく、健常者との交流を経て障がい者への理解を深める活動をしております。

瀬戸脇様
　コロナ禍で小学校から大学までの体験会の回数は少なくなりましたが、パラリンピックが 8 月の終わりから開催ですので、また体験会を始めているところです。

　障がい者のサッカーは 7 つあります。
耳が聞こえない・目が見えない・精神障害・電動車椅子など有りますが、今日はブラインドサッカーに特化してお話します。
ブラインドサッカーは目が見えていない状態を作り出し、声を出すとこでコミュニケーションを行います。
FC コレチーボを静岡に作りました。静岡には何故ブラインドサッカーチームが無いのかという問い合わせを頂き、このチームを作ろうということになりました。
名前は三浦泰年さんに付けてもらいました。ポルトガル語で「一緒に力を合わせる」という意味です。
マークについては、6 点は点字を表し、白黒黄は視覚障がい者が見やすいもので、これらを使ったロゴにしました。
チームの概要ですが、スタッフ 7 名、選手は全盲が 2 名・弱視者（色々な弱視がありますが）もおります。
練習は浜松、静岡で行い、中日本リーグという大会から 10/2，3@浜松フルーツパークの日本選手権を目指しております。これが私たちの公式戦初戦になります。

　子どもたちへの広め方として、動画を見てもらいます。【動画を見る】そこで、色んなことを発見してもらいます。どんなサッカーなのか？ルールは？どんな人たちが行っているのか？普通のサッカーとの違いは？など話し合いをしてもらいます。
障がい者のスポーツで、これほど観客の入るものはありません。

　観客はなぜ静かに観ているのか？子どもたちは疑問に思いますが、音が出るボールを使い、選手は音を頼りにプレーするので、観客の協力無しには成り立たないスポーツです。

　試合時間は 25 分ハーフ。合計 1 時間くらいは目隠ししないといけないので、健常者はもちろん、若干視力のある弱視者にとっても、相当しんどいものです。
日本のルールでは、健常者（フィールドプレーヤーで 2 名まで）、弱視者、全盲者が一緒に行えるのですが、国際ルールでは全盲またはそれに近い方のみに資格が与えられます。

　頼れるのは聴覚と触覚となりますが、ボールが止まって無音になった場合は、審判がボールを揺すって音を足します。音が無いとゲームが成り立ちません。ブラインドサッカーは唯一のコンタクトスポーツになります。また決められた場所内ではありますが、その中では自由に動けるというのはブラインドサッカーの魅力です。

　コートサイドにはフェンスがあり、ボールアウトすることはないので、触覚を頼りにコート内を動きます。触って動くというのが一つの大きな武器になります。

　ボール保持者は自分でボールコントロールはできますが、取りに来る人がどこから来るか分からないから、取りに行く人は「ボイ」という声を出して所在を示さなければなりません。「ボイ」というのは「行くよ」という意味です。

　コーラーとかガイドと呼ばれる人が、ゴールの後ろに一人いますが、これは見えている人が担当します。角度 45 度と正面を基準にプレーヤーに指示を出します。瞬間的なことなので細かい指示はしませんが、距離（メートル）は必ず指示します。声が通りやすい女性が担当することが多いです。但し判断力が必要です。もう一人 GK が指示します。主に攻撃はガイド、守備は GK が指示します。またグランドを 9 分割して各エリアの数字を決め、ポジションの指示も行います。これは監督が指示します。ブラジルなどの世界トップレベルでは、指示を出すと相手にも解ってしまうので、監督はあまり喋らないです。

　パラリンピックのポスターには「音と声でボールを感じる。静寂の中のスーパープレー」と言う言葉があり、これがブラインドサッカーのすべてを表しています。

　障がい者サッカー全体の使命として、小学生・中学生・地域に対して我々の存在を知ってもらい、優しいまちづくりに寄与しなければならない。それをチームの目標としています。